令和5年度

生活科・総合的な学習の時間研究委員会

世話係　　大和 正秀（今井小学校）

委　員　　小嶋 徳仁（田川小学校）
金井 教博（鎌田小学校）
横澤 理恵（開明小学校：委員長）
沼尾 浩輝（梓川小学校）
秦　　光一（安曇小学校：副委員長）
轟　　洋太（鎌田中学校）

目次

１　安曇小学校　生活科の授業より　２～　８ページ

２　鎌田中学校　総合的な学習の時間の授業より　９～１４ページ

３　今井小学校　生活科の授業より　１５～２０ページ

研究テーマ

生活科・総合的な学習の時間の実践における子どもの姿から、
子どもの学びをとらえ直し、育ちを見つめ寄りそっていく教師のあり方

テーマ設定の趣旨

授業実践を行い、見合う中で、子どもがどのような見方・考え方を働かせて学びを深めていくのかを子どもを主語にして委員で語り合う。子どものとらえに焦点を当てた活動を通して。教師としての資質・能力の向上を目指したいと考え、研究テーマを設定した。

１　安曇小学校　生活科の授業より

（1）　日　時　令和 5 年 6 月 29 日（木）５校時

（2）　授業学級　安曇小学校　生活科　1，2年生

（3）　授 業 者　　秦　光一　　矢島　久実子

（4）　授業のねらい

　ベニヤの絵の片面をヤギたちに、片面を全校のみんなに向けて描きたいという子どものつぶやきから、ヤギにとっても全校のみんなにとっても居心地の良いすみかを作ろうと考えた子どもたちが、柵・扉・看板づくりのあり方を考えたりヤギの大きさや行動を考えたりしながらすみか作りをすることを通して、ヤギへの親しみをさらに感じることができる。

（5）各委員の子どもたちのとらえ・授業の感想等

①今井小学校

　前回欠席していたAさんは、Bさん、Cさんと一緒に「かんばん・いらすと」づくりチームで活動。手袋がないことに気づき、教室に取りに行ったがなかった。（結果的に貸してもらえた）小さなのこぎりでコンパネを切っていくのは相当な労力だが、3人で交代して切る人、抑える人を担い、根気強く取り組んでいた。

　Bさんから「両手で持った方が切れるよ」などとアドバイスをもらったAさん。その通りやっていた。

「いいね」「まっすぐだね」という声がけを聞いて自分で切ったあとを確かめる姿もあった。

Cさんから「引くときだけ力入れればいいんだよ」というアドバイスがあった。 なかなか作業は進まない様子だったが、3人はお互いに励まし合う府に気があった。

3人の中に「早く作業を進めたい」「正確に進めたい」という願いのズレがあったように感じた。

　隣の「さく」づくりチームのにぎやかなやりとり、くぎを打つ音などに刺激をもらったAさん。気になる様子で時折少し離れたところから様子を見ていた。「くぎを打ってみたい」とおもっていたのかも知れないが、自分の持ち場は離れなかった。

まとめの場面。Bさんから「今日Aさんがいたから前より（作業が）進んだ」と言ってもらえた。たいへんな作業だったねということも先生に扱ってもらって満足そうだった。

Aさんのとらえ

・友だち（なかま）と協力することは大切なことだと考えている。
・自分の役割はきちんと果たそうとする。
・自分の役割の近くに気になる（興味を持つ）ものがあっても、自分の中で「やるべきこと」を自覚し我慢ができる。
・ルールをきちんと守るべきだと考えている。
・納得できる理由があれば、自分のやり方を修正することができる（他者の考えを受け入れることができる）

コンパネ切りに対する見方・考え方（その子らしさ）

Ａさん	Ｂさん	Ｃさん
丁寧に正確に（まっすぐ）切りたい	時間をかけずに早く切りたい	正確に切りたいけどやっぱり早く切りたい

同じ作業をしている中で思いに少し違い（ズレ）がある。

↓

お互いの思いを伝え合い、認め合う

↓

見方・考え方が広がり深まる

↓

次の活動、単元、他教科の学びにつながる

②田川小学校

1年生の A 君は、2年生の B 君、C 君よりも上手にくぎを打てていました。それは道具（ハンマー）の違いからくるものかもしれませんが、くぎ打ちやくぎ抜きの動きは見事で、慣れているように感じました。B 君、C 君も道具の違いを感じてはいましたが、途中で借りても A 君のようにはうまくはいきませんでした。A 君はお家などでもやっているのかもしれないなと感じました。

見通しがあったA 君

時間の終わり頃、A 君は上の板と下の℞材をとめるためくぎを打ちます。ですが A 君が上から打った釘は下の℞材をかすめ、ささってはいませんでした。それを見た B 君は「意味なー」と繰り返し言いました。A 君はそれを聞きながら、ハンマーの後ろのくぎ抜きで釘を抜こうとします。でも深く入った釘はくぎ抜きに引っ掛かりません。A 君は上の板を持ち上げ、突き抜けた釘を下から打ちます。下から打って釘の頭が浮いたか見て、また下から打っては見ます。下から打つという自分の行為がうまくいっているかどうかの確認を繰り返していたように思えてきます。

A 君は「意味なー」と言われても、言い返したり怒ったりしなかったのは、A 君の性格かもしれません。あるいは、突き抜けた釘をみて、くぎ抜きを使えばいい、そのためには後ろから打てばいい、という見通しがあったのかもしれません。状況をみてすぐに、自分がもっている知識から解決策を導き出したのかもしれないなと感じました。B 君の「意味なー（失敗）」は A 君にとっては完成までの過程だったのだなと思わされました。A 君のたくましさを感じます。

A 君の試行錯誤

自分もそうするな～と思って裏から釘を打つ A 君の行動をみていました。

しかし、かなり強く打った釘は後ろから打っても頭が出てきません。何度か打って、くぎ抜きでひっかけようとしますが、頭が出ていないので無理でした。

これからどうするかな？自分なら別の釘を打っちゃうかな～なんて考えながら、みていました。

A 君は突き抜けた釘の先と下のℝ材をじっと見た後で、突き抜けた釘の側面を打ち始めました。釘の先が下のℝ材にささるように力を調節して釘を打ち少しずつ曲げていたのです。その後、A 君は下のℝ材に釘がふれていることを確認しながら、上の板の釘の頭をやさしく打っていました。その後、力強く打ち始めます。確かに釘が入っていることが分かり、このやり方で大丈夫という確信をもてたのかもしれません。A 君は打つたびに「これでいい」と思えていたのかもしれません。

自分のやり方がうまくいくかどうかが、自分やった結果でわかる、その時間が保障されているのはとてもいいなと思います。「下のℝ材に釘がささっていない」という課題が生まれ、まずは基本的な方法（くぎ抜きで抜く）を考え、やってみる、それでもだめなら次は自分なりの方法（釘を曲げてみる）を試してみる、こうした自由な試行錯誤が保障されていたなと思います。

A くんの「やりたい」という願いを叶える

A 君が自分のやり方でうまくいき始めた時、向こうではまとめの時間が始まっていました。でも A 君は打ち続けます。A 君にとってはまとめよりも、打ち続けたかったのだと思います。今まさに自分のやり方でうまくいきそうで、あと少しで自分のやり方でうまくいくことが証明できるからです。先生が迎えにきても止めません。A君はまとめよりも、自分のやり方でやりとげたかったのだと思います。

そんな A 君を無理やりまとめに参加させるのではなく、やきもきしながら（参観者もいるし・・・）も見守っていた先生が、いいなと思いました。

A 君は見事に自分の考えたやり方（発想）で「下のℝ材に釘がささっていない」という課題を解決しました。自分のやりたいことが、やりたい方法で、やりきれた A 君にとって、この時間はとてもいい時間だったなと感じました。

ヤギへの小屋を作るときに、ヤギへの思いをもってほしいとは思いますが、釘をうつ、のこぎりで切るという作業にも面白みはあり、その時はその作業に没頭するのだと思います。ヤギへの思いは心の奥にあるとは思いますが。作業の間のつぶやきにポロっと現れたり、この先ヤギと関わるうちに培われ現れたりしてくるのかもしれないと思います。この先も、また新たな課題が生まれ、解決され、また・・・が繰り返されていくのだろうなと思いました。慌てずに、ゆったりと子どもたちとヤギとの生活を楽しんでほしいなと思います。

③鎌田小学校

ヤギを飼うというダイナミックな実践を参観し、短い時間でしたが様々な点を学ばせていただきました。教室の外に出ると、目の前にブランコや滑り台などの遊具があり、遊具で遊びながらヤギと関わる子どもたちのほのぼのとした温かい姿。子どもたちに合わせてゆったりと時間を過ごす穏やかな雰囲気も大切だと感じました。私がヤギを見ていると、「ぼく、ファームでヤギ（シロ）に頭突きされた」と話しかけてくれたRさん。まだヤギには慣れていないように見られたが、彼は「とび

ら」づくりのグループの一員として活動していました。初めは、友だちが柱を切るところを近くで見つめるだけで参加しようとはしませんでした。しばらくすると、落ちていた釘を拾い集めるなど、木を切る活動に入っていきません。そのうちに、一緒にやっていた2年生の女の子に「やってみたら」と声をかけられると、鋸を使って木を切り始めましたが、板に対して平行に切るのであまり上手く切れません。印で書いてある線の上を切ろうとするが、上手く切れず、女の子と交代することになりました。他の子がR度をつけて切っているが、彼は、まだ切るコツがわからないようでした。それから、他のグループの様子を見に出かけ戻ってくると、彼は蝶番を手にしていました。その姿から、彼は木を切ることよりも、蝶番を早く釘で打ちたかったのではないだろうかと思いました。そして、ただ釘を持っていたのではなく、釘を打ちたかったのではないかと気づかされました。今回は切る作業だったので、彼にとってはあまり活躍ができなかったかもしれません。今後、釘打ちが必要となってくる場面で、どのような姿を見せてくれるのか楽しみです。また、ヤギを少し怖がっているようでしたが、授業の終わり頃に、友だちにヤギを持ってもらい触っていたので、ヤギとの距離を少しずつ縮めようと頑張っている姿も微笑ましかったです。

④開明小学校委員

○やぎを飼っているクラスを実際に参観するのは初めてでした。どんな風に子どもたちはやぎと関わるのだろうと楽しみでした。まだ、出会いから間もないということでしたが、近くに寄ってなでたり、抱っこしたり、おしっこをする様子を観察したり…かかわることすべてに子どもたちの表情がキラキラしていて、とても素敵でした。

○柵づくりのグループを見させていただきました。スタートしてから少しの間、ふらふらっとしていた A さん。くぎを打ってみようと実際の活動が始まると、ななめにかませるアイディアで大胆にくぎを打ちました。２年生も反対はしていない様子でしたが、「それはがんじょうかな？やぎさんも全校のみなさんも安全かな？」という先生の問いに、これでは不十分と気づき、長いくぎに変更し、板の厚さも確認して打ちはじめました。初めのくぎがあと少しで入る！というときに「できた！」と彼が言いました。すかさず先生が「どうかな？あともう少し。横から見てごらん？」とアドバイスしてくださり、その後のくぎがしっかりと打ち込まれていくことにつながっていったと感じました。

　すでにあった柵との結合部分の９本のくぎのほとんどを A さんが打ち込みました。決してひとり占めしているのではなく、２年生との助け合いの雰囲気を感じました。曲がってしまったくぎの修正も上手に、しっかり打ち込んでいきました。８本目。打ち始めて１０秒もしないうちにのこり2㎝ほどまで打ち込みました。何度も試行しながら打って、すごくうまくいった８本目。思わず時計を見てしまうほど速かったです。「はやい！はやい！」と何度も大きな声で手ごたえを訴えていました。反対側の杭を先生にもらい、また打ち始めました。しかし、杭に入らず、ななめになったくぎがはみ出していました。気づくかなぁ？と思っていると、２年生が「これだめだ！意味ないよ！」とはみ出していることに気づいてくれました。板にかなりしっかり打ち込んであったくぎ。A さんが下からハンマーでたたいたり、上から抜こうとくぎ抜きを当ててみたりしますがびくともしません。どうするかな、抜くには先生の力が必要そう…と思って見ていました。終わりの声がかかりましたが、A さんは動きません。それからななめになっていたくぎの向きを修

正すると、板についたままのくぎを杭に打ち始めました。「板がついたくぎ」なので打ちにくそうでしたが、杭と板がくっつくところまで、打ちました。先生が再度呼びにきてくださいましたが、「これ打っちゃったら！」と言って一生懸命打ち込みました。見ていた私は、「がんばれ、もうちょっと！」と彼を応援してしまいました。（すみません）終わりのあいさつを終え、途中になっていたもう一本を打って、片づけていました。

子どもたちが、「頑丈な柵に！」という願いに向かって、語りながら互いに手助けをし合いながら活動した時間はとても素敵でした。何本ものくぎを打ち続け試行する中での手ごたえや工夫に感動しました。自分は、いつも何事も「ちょっとあぶないんじゃないか」と任せられないのですが、子どもたちの中で、活動しながら解決していく姿を目の当たりにし、たくさん学ばせていただきました。

③鎌田中学校

・子どもの問いや願いに沿った活動から

子どもの「問い」や「願い」は何かを考えながら参観させていただきました。「かんばん・いらすと」づくりのグループでは、交代でベニヤ板を切る様子が見られ、作業中にS生がA生に「もうちょっと前に出て切れば？」「両手でやった方が切れるよ」と声をかける姿が見られました。声をかけられたA生は言われた通り、両手で切るようになりました。このような姿や、その後のT生の「ほかのチームより早くやろうね」という発言から、彼らが「早く切りたい・どうすれば早く板を切れるのか」という願いをもって活動を進めていることを感じました。また、前述したA生の姿に、友とのかかわりから、自身のやり方（あり方）を見つめなおす姿が現れていたのではないかと感じます。子どもの願いに沿う学習（活動）内容であったからこそ生まれた姿であろうと考えます。

▲☞をかけられる前のＡ

▲☞をかけられた後のＡ

・子どもにとっての協働とは

「早く木を切りたい」という願いのもと、３人の児童は協働的に活動に取り組んでいるように見えました。疲れるので交代しながらのこぎりを使う、待っている人が切った際に出た木くずを吹き散らす、という姿が主でしたが、活動の中盤からやや状況が変わったように見えました。ヤギが近づいてくる機会が度々あり、自分たちがのこぎりを使っていることから、ヤギにケガをさせてしまうことを危惧してか「しろちゃんとゆきちゃん来ないでよ？」「工事中～」という発声とともに、安全な場所へヤギを誘導している姿が増えました。また、ベニヤ板の上にアリが乗ることもあり、その際は板から払う姿とともに「アリも切

▲待っている間に間に木くず

を吹き飛ばすT 生

っちゃう」とつぶやくA生の様子も見られました。待っている児童の仕事にヤギの誘導が追加されたようでした。それを強く印象付けたのが、教師の「待っている人は暇？」という問いかけに対する「暇ではない」という発言だったように思います。私もですが、協働的というと同じ作業を分担して行う前半の様子を期待してしまいますが、児童にとっては一見暇にも見える何もしていない（実はヤギに視線を向けている）ことが、協働的に関わっている姿そのものなのではないかと、生徒を見る目に少し変化があった場面でした。

２　鎌田中学校　総合的な学習の時間の授業より

（１）　日　　時　　令和５年９月１３日(水)　　第１～５校時

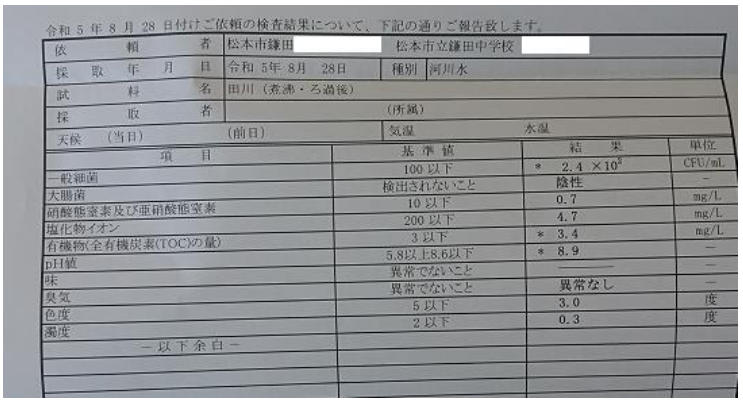
（２）　授業学級　　鎌田中学校　総合的な学習の時間「KMD タイム」　３年生

（３）　授 業 者　　轟　洋太

（４）　授業のねらい

　しらかばの日に向けて準備を進めていく場面で、試食してもらうのに必要な量や味、製作手順などを話し合い、実際に準備を進めていくことを通して、これまで取り組んできた水質改善に関する活動を振り返りながら、その成果を伝える発表（公開）への見通しをもつことができる。

（５）各委員の子どものとらえ・授業の感想等



令和 5 年 8 月 28 日付けご依頼の検査結果について、下記の通りご報告致します。

依頼者	松本市鎌田 [redacted]	松本市立鎌田中学校 [redacted]	
採取年月日	令和 5年 8月 28日	種別	河川水
試料名	田川（煮沸・ろ過後）		
採取者	（所属）		
天候 （当日）	（前日）	気温	水温

項目	基準値	結果	単位
一般細菌	100 以下	＊ 2.4×10^2	CFU/mL
大腸菌	検出されないこと	陰性	—
硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素	10 以下	0.7	mg/L
塩化物イオン	200 以下	4.7	mg/L
有機物(全有機炭素(TOC)の量)	3 以下	＊ 3.4	mg/L
pH値	5.8以上8.6以下	＊ 8.9	—
味	異常でないこと	――	—
臭気	異常でないこと	異常なし	—
色度	5 以下	3.0	度
濁度	2 以下	0.3	度
― 以下余白 ―			

①今井小学校

○１日全校で総合的な学習の時間を行うという鎌田中の姿勢がすばらしいと感じた。自分で考え、自分の言葉で伝えること、課題を共有した仲間とチームとして取り組んでいくことなど学習指導要領はもとより、社会から求められている力をつけさせていくという意気込みを感じた。

○授業公開学級では、「水」をテーマにチームに分かれて課題解決に取り組んでいた。田川の水をどう浄化するかに取り組んでいたグループでは、送られてきた水質検査の結果からまだ飲用には適さないという事実を突きつけられて、今後どうしていくか検討していた。「田川の水を？」と大人は思ってしまうが、おそらく小学校時代から田川に親しんできた生徒たちは、「何とかなる」「何とかしたい」という思いがあったのだと思う。

○田川、薄川合流地点まできた生徒たちは、 相談して、田川ではなく薄川から下ってきた水を採取していた。会話はうまく聞き取れなかったが、「薄川の方が水質がよいのでは」という予想があったのかもしれない。

○煮沸－濾過では難しいという壁にどう向かうかとても興味深い。流域全体の環境問題につながっていくかも知れない。いずれにしても、自分たちの地域に関心を持ち、何らかの形で将来貢献しようという心情を培う意味においてとても大切な活動だと感じた。

〇担任が、余計なお世話をせず、時間・モノ・場所を提供すること、生徒やグループ同士の考えをつなぐ役に徹していることがとてもよいと感じた。小学校の教員にとって、中学校でこのような取り組みをされていることはすごく刺激になった。小中の学びの連続性を考えた上で小学校でも総合や生活科を展開していく必要を感じた。

②田川小学校

一昔前の中学校の総合とは違っている（すごくいい意味で）と感じ、とても驚きました。会う子たちがみんなあいさつしてくれて、さわやかな気持ちになりました。景色がよくてびっくりです。

２年の総合の最後で田川の水が水道水とあまり変わらないことを知り「じゃあ飲めるんじゃね？」というところからつながっているとお聞きしました。子どもたちの何気ないつぶやき、それを拾って位置づけたことが素敵だなって思いました。
強引に地域の材である田川で…ではなく子どもたちが引き込んできた感じがしていいなと思いました。だから自分（たち）ごとになっているのかなと思いました。

地域の川（僕たちの川）の水が飲めるくらいのものであることを示す。このことを突き詰めれば、田川への思い、地域への思いみたいなものが心の奥の奥にはあるんだろうなと感じます。面白そうだからでやっている子もいるとは思いますが、それでもいつか地域への思いみたいなものに、ふとした時につながっていくのかなと感じました。

そのために、水質改善の工夫をするチームがいて、そのチームの工夫できれいになった水を使って様々に調理するチームがいる…。全部がつながっているいいテーマだなと思いました。

田川の水を飲む、あるいは田川の水で作ったもの…正直ためらいます。ですが、それをクリアしないと田川のよさを PR できない。データに基づいた科学的根拠を示して、安全性を訴えていく。

ある意味、今日本が世界中の国に向けてやっていることに通じる気がしました。規模の違いはあるけれど、全く同じだなと感じました。すごいことをやっているなと、ワクワクしました。

子どもの具体の姿から（ピーラー使い、包丁使い）

かき氷チームの子どもたちを中心にみました。

手前の男の子はりんごの皮をむいています。奥の男の子が「怖い、怖い」と言います。１/４のりんごの芯の部分を取ろうと力を込めます。一歩間違えば自分の手を切る…見ている方がひやひやです。女の子が、りんごを置いて芯の部分を切る方法を教えます。少なくとも手は切れませんが、どうもしっくりこないようで、また持ってりんごの芯を取り始めます。見ている友だちはもう彼の手元から目が離せません…。

そこにすっと家庭科の先生？がやってきます。そして包丁と親指でりんごの皮をはさんでむくやり方を見せます。「プロだ、プロだ」と言いながらやり方をじっと見ます。先生は全部やるのではなく、少しやって包丁を置きました。彼は見たとおりにやろうとします。迷うと奥の子が親指の置き方を教えますが、やはりうまくいきません。そんな中、「ピーラー」が現れます。

彼はピーラーの虜になります。包丁でむくより安全にきれいに皮が取れる。彼は目の前で作業していた女の子のガサガサの皮むき跡を見て「ピーラー使えば」と渡します。そしてさらに両隣の友だちの分のピーラーも持ってきて配ります。これまで危

険な包丁さばきを見守るしかなかった2人にも仕事が与えられ、作業スピードが一気に上がりました。1人でやるのを周りの人が見ている、ではなく、1人1人がやる＝みんなでやっている、という姿になりました。友だちに仕事をシェアすることのよさだなって思います。女の子も2人、ピーラーを使っています。

そんなピーラーイケイケの空気の中、奥の子が「俺、ピーラー苦手…」と言いと包丁を持ちます。「チャレンジしてみる」と照れ隠ししながら。家庭科の先生がやったように包丁を持ち、包丁と親指の間に皮をはさみながら、少しずつ慎重にむいていきます。「プロだ」と言いながら見ていた彼は、家庭科の先生のやり方をすごいと感じ、やってみたいと思っていたんだなと感じました。

ピーラーのよさをしった子と包丁を試したい子のエピソードはクラスの総合のゴールには大きな影響を及ぼさないと思います。

でも、田川の水…という大きなゴールがあり、そこまでの探究のサイクルみたいなものがある中で、その過程の子どもたちの行動をよく見てみると、ふとした行動の中にも小さなサイクル（学び）があるのだなと思わされました。

本人さえもその意味や価値を意識しないくらいの小さな学びも位置づけていきたいなと思いました。

小学校の総合も、もっと子どもたちの「やりたい」を尊重していく必要があると考えさせられました。刺激的な授業でした。

③鎌田小学校

久しぶりに中学生の授業を参観でき、とても新鮮でした。ちょうど、鎌田小で育った子どもたちが鎌田中へ進学するので親近感があり、どのように変わっているのか子どもたちの姿を見ることが楽しみでした。授業を参観し驚いたことは、中学３年生になるとこんなにも自分でできることが増えるのかということです。担任として、小学1年生の子どもたちと共に毎日を過ごしている私にとってはギャップが大きく、小学校で学んだ経験が中学の育ちへ繋がっていることを考えると、やはり小学校での積み重ねが大切であり、小学校のうちから、様々なことを経験し、しっかり力をつけさせなければならないと感じました。

さて、鎌田中で行っていた１日総合を参観し、丸ごと一日かけて総合にどっぷりハマる時間もいいものだなと思いました。子どもたち一人ひとりが生き生きと活動し、それぞれが明確な目的を持ち、自分たちの経験を活かし行動している姿が本時でも現れていたと思いました。参観させていただいた轟先生の学級では、昨年度の川の学習から発展し、子どもたちの意識を大切にしながら授業展開がされており、また、子どもたちがやりたくなるような活動（かき氷、水まんじゅうづくり）を上手く取り入れている点など、先生が子どもに任せながらもしっかり支え見守る姿が印象的でした。何よりも、学級づくりがしっかりされているからこそ、子どもたちが主体的に、そして協働して学習に取り組めているのだと勉強になりました。

水まんじゅう作りの一場面ですが、形をきれいにしたいと願いをもつＡさん。「汚いじゃん」と作った水まんじゅうが丸くならなかったことが気に入らず、やり直して作ると「めっちゃ いいじゃん」と丸くなった水まんじゅうを友だちに見せて嬉しそうに話していました。自分の中で「こんな水まんじゅうを作りたい」とイメージをしっかり持てているからこそ、この姿が見られ、やらされているのではなく、自分の願いや思いを持って活動している姿であると感じた場面でした。

調理室の中では、おやきづくり、カレーづくり、リンゴジュースづくりなど、他のクラスも活動していました。楽しそうに活動する子どもたちの姿から、自ら地域へ出て自分たちで材料を手に入れて作っていく活動は、子どもたちにとって願いや思いを強く持ちやすく、面白いものになっているんだと感じ小学校でも参考になりました。

④開明小学校

中学校の総合の時間を参観させていただくのは、初めてで勉強させていただくことがたくさんありました。参観させていただき、ありがとうございました。

まず、「１日総合に浸れる時間」に感動しました。小学校は時間割の工夫でまとまった時間をとることができるのに、１日中なにかに浸らせたことがありません。鎌田中の生徒たちの「取り組んでいることは互いに違っていても、全校のみんなが自らの課題に向かっている時間をあちらこちらで共有している」、その雰囲気が本当に素敵だと思いました。

いざ、１日総合のはじまり！では、先生からは課題の確認、日程の確認と簡潔なお話がありました。自分なら１日子どもたちを放してしまうので心配でいろいろ言ったり、確認したりしてしまい

そうです。子どもたちの活動時間、子どもたちが問題解決に向けて探求する時間を少しでも子どもに残したい、そんな先生の姿にまた感動しました。

調理室での様子を参観させていただきました。シロップづくりのグループと水まんじゅうのグループを見せていただきました。シロップづくりでは、りんごの皮をむいていました。手つきが危なっかしい子もいましたが、自分なりの方法をその場で見つけ、その方法がなんとなく自分にとって手馴れてきた場面をみて、自分なりの方法で目の前のことを解決していく力や、その速さに、中学生ってすごいなぁと感心してしまいました。

水まんじゅうづくりでは、試したいことを次々と試していました。自分たちで計画して実践していく力も感じました。できた水まんじゅうのもとを型に移す時、自然と分担して型に入れていたり、友だちと違う仕事を進んで行ったり。中学生は周りをみてこんなにも動けるのか、と驚きました。このような姿は、子どもたちの行動力を、実際の行動につなげている動機みたいなものが子ども たちの中にあるからなのだろうと思いました。田川の水をアピールするというテーマから起きたプロジェクトが自分事になっていてすばらしいと思いました。他学年の取り組みから、おやきを材にして地域とつながっていることもお聞きしました。自分たちの住む地域に着目して、行動を起こし、外へ発信するという流れも見せていただいたように思います。

⑤安曇小学校

1　日中総合的な学習を行う鎌田中学校の画期的な実践を見せていただきありがとうございました。水質改善グループの様子（男子生徒グループ）を見させていただきました。

ネットで水質改善の方法を探る子どもたち

水質検査の結果用紙の結果からアルカリが強いことを知った生徒たちの対話。

生徒A　「アルカリを弱酸性に下げる方法？」

生徒B　「ネット、むずかしい～」

生徒C　「土を入れるってあるけど、汚れるじゃん」「ビートモスを入れるってあるけど、土を入れろってこと？」

「なんだか水槽のことしか出てこない」

（リーダーS、先生のところに行き「アルカリに寄っているんだよね」パックテストのことを相談）

先生　「レモン果汁はどうか。強いけど１滴でも入れると…基準 pH５．８～８．６なら OK」

「浄化した水を用意してそこにレモン１滴、３滴？何mlの水に対して何mlのレモン汁か考えてみる？」

（リーダーS　グループに戻り仲間に報告）

生徒C　「レモン汁を入れると味が変わってくるじゃん」

その後、田川に行き水を集めに行く。

〇水質改善グループは、他のかき氷グループや水まんじゅうグループの活動の前提になるので、大事な役割と自負しながら今までの学習を引き継いで頑張っているように思いました。クラスのためにという場になっていて素敵な総合的な学習だと感じました。まる１日総合的な学習に取り組める学校の環境も素晴らしいです。安曇小中でもできるかもしれないとヒントをいただきました。他の２グループとは大きく違う意味合いを持つので、水質改善グループが今後の意欲的な活動に繋がっていくために文化祭の活躍の場を大切にしていくと良いと思いました。

〇本時のネットで調べる活動の中で、ヒットする内容が生徒にとって難しかったりずれてしまったりすることがありました。S さんは轟先生に相談していましたが、さらに保健所などに直接電話するなど、人と人が直接触れ合う解決策もあっても良いかと感じました。

３　今井小学校　生活科の授業より

（１）日　　時　　令和５年１１月２８日（火）　３・４校時
（２）授業学級　　今井小学校　生活科　１年生
（３）授 業 者　　中島　雅也
（４）授業のねらい　四季折々の自然の良さや変化を味わってきている子どもたちが、慣れ親しんだフィールドで、自分でやることを選択、決定、判断、実行することを通して、それぞれがもつ感覚をより豊かにし、興味・関心の芽を育てる。

（５）各委員の子どものとらえ・授業の感想等

①田川小学校

繰り返し体験することで自分の世界を広げていく

とてもすてきな授業を参観させていただきました。ぬるっと始まり、それぞれがそれぞれの場所に散っていく…。いいなぁと思います。

Ａくん。教室に残り、カメラを作ることに没頭しています。とても気になり、彼と行動を共にすることに。

まずは池の水がないことを説明してくれます。この先、落ち葉を何とかしてからまた水をいれることを教えようとしてくれます。私が分からなそうな顔をしていると落ち葉がない場所を示して落ち葉のある場所と比べながら、今までは水が入っていて行けなかった場所なのに水を抜くと行けるようになる。水が入っている時には絶対に行けなかった場所に行けるというのは面白い感覚なんだろうなと思います。この場所のことなら何でも知っていると言わんばかりに見下ろします。

池のほとりの小さな赤い実（ぐみ？）を拾います。「ぼくんちも、食べたことあるよ」とつぶやき、「でもまずいから捨てちゃう」と水のところに投げ入れます。「ぼくんちにも」という言葉が彼の原体験でもあり、「ぼくんち」と「学校」がつながっているんだろうなと思います。家では「学校にも」と話しているのかなと思います。そして、実を水に投げ入れる時間となります。

その後も、いろいろな小道を行き、そこにある枝にピョンとぶら下がります。そして、サルスベリの木を見て「はじめは怖かったけど…」とポツリ。枝にピョンとジャンプした時は「おぉっ！」と思ったけれど、子どもたちは自分がどれだけできるか、日々試しているのだろうなって思います。池の周りの岩によじ登ったり飛び下りたり、木の枝に向かってジャンプしたり、ある意味課題に向かって自分の力を試す姿がありました。「ここはいけるか？」「いけた！」のせめぎ合いを通して、自分でできることを知り、自分ができることの範囲を分かっていくんだろうなと思います。運動してなんて言わ

なくてももう運動している。子どもたちはそういう生き物なんだなって改めて思わされました。

Ａくんは校地内を隅々まで案内してくれます。緑色のプール、何も書いていない看板、深い側溝、蛇がいた道などなど、説明し（つぶやき）ながら進んでいきます。これまでの探検を通して今井小の「あおとマップ」がもうあるんだなと思います。

深い側溝をのぞき込んで「カマキリいるかな？」とつぶやきます。きっとそこでカマキリとのエピソードがあったんだろうなと思います。そういうことが、原体験となり、積み重なっていくんだろなって思います。ジャングルジムに上って下りて、ふと「虫を探している」とつぶやきます。私に説明しながらもどこか気持ちの奥で虫を探していたんだなと改めて思います。そういえば彼は最初、コンクリートブロックを持ち上げてその下をみていました。これまでの経験を駆使しています。そしてそこにいないことを確認しつつ、知らず知らずのうちに季節というものを感じているんだろうなと思います。

雨どいの筒のところで立ち止まり「ここガンガンってやったら氷が出てきた」と軽くたたいています。彼にとってここは氷製造機です。これから先、寒い日にはここに来て、氷を出すんだろうなと思います。こういうことをしながら、気温と水の関係を肌で感じ、分かっていくんだろうなと思います。

ひとしきり説明してくれた後で「そろそろ中に入るかぁ」と室内に移動します。入る前にはあっちの校舎は3階、ここは2階なんだということを説明してくれます。庇があるところの上は「何もない」ところだから、ここは２階なんだということを説明してくれます。自分なりの言葉で、ここが２階であることを説明します。彼なりの理由を添えて。「何もない」部分を「屋根」や「屋上」と言うことを彼はこれから、何かのきっかけで獲得し、自分の世界を広げ、より正確にしていくんだろうなと思います。

その後、廊下に置かれた様々なものを説明してくれます。知っていることを誰かに伝えること、相手がそれを聞いてくれることって素敵な時間だなって思います。「ぼくは知っている」ということを確認できるし、相手に教えるという自分の行為が、相手にとってよいものなんだと伝わるように思えるからです。

Ａくんは、どんぐりが置かれた場所で、真っすぐに小さなどんぐりの小さな黒いシミ？を指さし「これ何だろう」と言います。彼はこの場所で、いろいろ触りながら想像を膨らませ、そのことを気にしていたんだろうなと感じました。

その後体育館に向かいます。鉄のドラム〇を叩き、階段を使って２階に行きます。「としょかん」という字を読み、真ん中の階段を下り、今度は自分の教室の近くの階段を上って2階、そして3階へと行きます。その歩調は外とは違い、ゆっくりしたものに感じます。どこか緊張しているような…。校内は外とは違い自分だけの場所ではないこと、多くの人が使う場所であることを、肌で感じているのかもしれないなと思いました。

本当にステキな授業だったなって思います。多くを学んでいる子どもたちでした。それをみることができたか、その子のつぶやきや、行動などの行為の意味を考えることができたか、問われているのは教師の方なんだよなとまた思わされました。授業参観させていただきありがとうございました。

②鎌田小学校

中島先生と子どもたちの姿から、普段の生活の中で、子どもの意識を大切にしながら共に授業づくりをされていることが伝わってきました。「子どもってこんな風に様々なことを考えながら学んでいるんだな」と考えさせられました。落ち葉を集めてのベットづくり、そして、シマヘビを飼っていることに驚きましたが、自然が豊かな環境の中、子どもたちのペースで自然と仲良くなりながら学んでいることが伝わり勉強になりました。

私は S さんを中心に見ていました。雨が降っている中、ジャングルジムで遊んでいる S さんを見ていると、S さんが私に声をかけてきたので追ってみました。しばらく見ていると、近くのプラスチック板に目がいき、「いい傘をみつけた」と板を持って歩き回り始めました。「すげ～でかい傘だよ」と他の子に声をかけていきますが、反応はいまいちのようで…。

ただ、彼にとっては、お気に入りの傘をみつけたようで賛同してほしい人を探しているようでした。校庭へ行くと雨が止み、そのうち強い風が吹くようになりました。そこで風で板を飛ばす遊びを始めると、偶然、板が体にくっつき風が当たらなくて温かいことに気づきました。近くにいた友だちを呼び、一緒に「ぽっかぽか」と言って暖を取る姿がありました。そして、一緒に暖を取った Y さんが「みんなで南庭へ行って、これをソリ代わりにして滑ろう」とアイデアを出し、2 人で遊びが始まりました。ソリにして遊び出すと周りに子どもたちが集まってきて遊びの輪が広がっていきます。「これじゃあ、汚れる。すべり台みたい」と言って遊びが変わっていく姿を見ると、「遊びを通して、色々と試しながら彼は何かを学んでいるんだな」と感じる場面でした。そして、次から次へと活動が続き、雨も気にせずに遊びに没頭する子ども、ダイナミックに遊ぶ子どもなどの姿を見ると、改めて子どもにとって遊び込む時間が大切であると実感することができました。授業を参観し、子どもが無邪気に遊び込めるような授業づくりを自分がどれだけできていたのか、自分の授業を見つめ直すきっかけとなりました。

③開明小学校

○　二時休みが終わり、どんなクラスかな？と教室の前でわくわくしていると、席にもどる子がほとんどなく、あちらこちらで子どもたちが動き始めていました。「時間」という枠にとらわれずに活動が始まっていることにびっくりしましたが、これがこの子たちにとっての生活科のスタンダードなのだと思うととてもすてきだなと思いました。黒板には、集合時間が書かれており、予定された３－４時間目、たっぷりと活動にひたってほしいと願う先生の思いも感じ、また、素敵だなぁと思いました。

○　ろう下で「ミミズの水替え」をする子どもたちに出会いました。大きくて立派なミミズが水深３センチくらいのかごの中にいました。ミミズっておよげるのね…と心の中で驚きながら様子を見ていました。水を替えるのに、別の場所に動かしたいけれど、Ａさんはつかもうとしません。一緒にいたＢくんに「Ｃくん、呼んできて！」と伝えます。なんでも触れるＣくんに「ミミズこっちにうつして！」とお願いして、うつしてもらいました。その後、かごを洗って、新しい水にしてうつしますが、予定とちがったのか「あ！ちがう！」と言って、Ａさんがミミズをつかみました。ph調整剤（？）を入れて、改めてかごの中へ。はじめはＣくんに頼んでいましたが、その後はＡさんがミミズをさわって水替えをしていました。大きな声で「よし！ＯＫ！」と満足そうに活動を終えました。

○　Ｃくんです。３時間目開始わずかだったと思います。チョウをつかまえてきました。「え？もう見つけたの？つかまえたの？」とびっくりしました。教室にあわてて入ってきたＣくんは、窓際でなにやら探しています。チョウを入れておくのにちょうどいいかごを見ていました。たくさんある中から、味付け海苔の容器を選びました。フタには穴があけられていて「これ！」と取りました。なれた様子でチョウをうつすと、また外へ。Ｃくんは教室の前のにわの植え込みあたりでごそごそしているのが見えました。しばらくすると、先ほどの容器には土や枝、葉っぱが入れられてチョウのおうちができていました。ばったり出会ったＡさんとＢくんに見せます。「つかまえたの？すごいね」と言ってもらい嬉しそうにしていました。「でも飼える？」と聞かれました。「う―ん。」と言って、少し歩くと、容器から小さな枝を2つ取り出しました。そして土を少し足して、「ＯＫ」と言いました。チョウが飼えるか？と聞かれ、チョウのおうちの環境に目を向けたのかな？と感じました。

　そのあと、ペットボトルで遊びだしたので、もう終わりかな？と思っていたら、なんと2つ目のおうちをつくる材料を取りに行っていたのでした。先生に手伝ってもらってよい大きさにしてもらうと、また外へ出かけていきました。

○　私が見せてもらった3人の子どもたちですが、「やりたい」と思ったことを自分たちで進められていました。そこには自分たちでできる環境があって、どんどんやってもいい雰囲気がありました。選べるかご、中和剤、ペットボトル、そして目の前の自然。困ったら必要な手助けをしてくれる先生。物的環境だけではない、心の環境も子どもたちの「やりたい」を支えているのだと思いました。

④鎌田中学校

・「おちばのふかふかべっどをつくりたい！」

全身全霊で、自然と関わろうとする子どもたちのエネルギーに圧倒されました。写真は、落ち葉でベッドを作ろうとしている様子です。強風のせいでしょうか、以前作った壁が壊れてしまい、修繕しようとしているようです。Ｙさんは「屋根も作りたい！」自分の部屋や、秘密基地のようなものをイメージしているのでしょうか。雨もぱらついています。もしかしたら、雨の日でも横になれるような場所にしたいのかもしれません。「壁を作ると、屋根を付けられない！」自分の身長では届かないようです。Ｙさんは「屋根のあるベッドにするにはどうしたらいいんだろう？」と考え、隣のＳさんに聞きます。「Ｓちゃんどうやろう？」子どもたちが自然と(二重の意味で)関わりながら、自らの設定した願いや課題を解決するために、めいっぱい追究している姿が見られます。

ここにいる子たちは、ここから協力して壁を直す＆屋根を付ける、という課題に突き進んでいくんだろうな…と思ってみていると、疲れてしまったのでしょうか、女の子が一人座り込んでいます。全く動きません。気になって様子を見ていると、もぞもぞと動いています。不意に立ち上がって、感触を確かめるかのように落ち葉の上で足踏みをしました。彼女は休憩していたのではなく、落ち葉のベッドの感触を味わい、確認していたようです。落ち葉のベッドに座り込み、(時には寝転んで)文字通り全身の五感で、全力で身近な自然に浸ろうとする姿でした。彼女はこのあと、壁の修繕に合流していきましたが、きっとこの落ち葉の感触を味わえる特別な場所を、さらによりよい場所にするために追究を進めていったのだと思います。

ベッド作りをしていたグループの他にも、木や葉っぱで工作をしたり、水棲生物の家を作ろうとしていた子もいました。同じ学級内で、同じ授業中に、それぞれが関心のある活動を目いっぱい行う、複線的な授業が展開され、思い思いの追究や関わりを生んでいます。

・やってることがすぐ変わっちゃうけど、それがいいんだ

途中、雨が降り数分で晴れると校庭から虹が見えるように。さっきまでベッドの周りを囲む壁を作ろうとしていた子たちは校庭に出て、「雨が上がったよ♪お日様が出てきたよ♪青い空の向こうには虹がかかったよ～♪」と繰り返し歌っていました。「もう壁の修繕はいいのかな？」と思いつつも、これだけ見事に虹が見えると、大人でも手を止めてしまうな、とも思います。しばらく後、またベッドの方へ移動し、また再開するのかと思いきや、その隣の小山に壁の材料であったプラダンボ

ールを敷いて、そり滑り？滑り台？のような遊びをスタート。活動がコロコロ変わって、結局この後壁の修繕は再開せず、遊び倒しています。

中学校で総合的な学習の時間を展開すると考えると、イメージするのは大きなテーマがあって、目標や目的を共有して、課題を設定し、その解決に向かって追究を進めていく、そんな流れです。途中で活動が変質することはあれど、大きく方針を変えたり、テーマや目的を変えたりするようなことは、あまりないように思います。

ですが、小学校 1 年生はそうでなくていい。むしろこれこそが、自らが関わる世界を、自らの手で広げている姿であると感じられました。当初の目的であった活動を忘れるぐらい、今目の前にある自然との関わりに没頭できる。全身で風を、においを、光を感じ、興味を惹かれるまま活動を変え、味わい尽くす。大人には遊んでいるようにしか見えなくても、その内実は「材と関わる」、総合的な学習の時間において最も重要なプロセスの一つであると感じました。

きっとこの子たちは、何年か後に、中庭にあった滑り台を改良してみたいとか、保育園の子たちにも遊んでもらうにはどうしたらいいかなとか、そのときには落ち葉のベッドも改良して遊んでほしいとか、自身の関わる世界を大きく広げていくのだろうと思います。自分の学級で総合的な学習の時間を立ち上げたときに、川をテーマに活動したいと言った生徒たちを見て、正直なことを言うと「なぜ川？そんなに魅力的なのか？」と思ったのですが、きっと私の見ている中学生も、小学校でこんな風に自然の中に五体を投げ出すような経験を積んできたからこそ、自然に関わる活動を魅力に感じていたのだろうと、今さらながら思います。

改めて、小中での学習活動の連続性を感じ、小学校での実践に大いに興味を惹かれる参観となりました。授業観や子ども観が変わりそうです。いい刺激をいただきました。